



法華経寺祖師堂で開かれた入行会。大音声で読経する副住職

新
満

復刊第十九号
2013年 11月
身延別院発行
〒103-0001
東京都中央区
日本橋小伝馬町3-2
Tel 03-3661-3996
Fax 03-3663-2766

大荒行入行会

副住職が第参行へ

身延別院の副住職、藤井教祥師が十一月一日、千葉県市川市の中山法華経寺日蓮宗大荒行堂に入行しました。今回は第参行です。一年で寒さの最も厳しい来年二月十日までの百日間、水行と読経三昧の日々を送ります。

教祥師は入行の前に、「初行、再行のときは諸先輩の指示で動くことが多かった。第参行は、自分の目標に向かって集中できると思う。檀信徒の皆さんからお預かりした大黒様や壱百日祈願等をしつかりと御祈願したい」と語りました。

大荒行は、日蓮宗に伝わる祈祷法の伝授のために行われます。入行僧は午前三時前に起床し、午前三時から午後十一時まで一日に七回の水行にのぞみます。水行の間は読経三昧。修行の回数に応じて、初行、再行、参行、再々行(四行)、五行と、それぞれ伝師から秘法の伝授を受けます。参行は「大黒相承」と言って、大黒様の力をいただきます。

一方、睡眠時間は一日二時間半。食事はお粥とみそ汁だけの粗末なもの。寒さ、餓え、睡眠不足の極限状況を乗り越えた者だけに日蓮宗独特の加持祈祷が許されます。

教祥師は平成二十年十一月から翌二十一年二月まで百日間、第再行を成就しています。今回は、五年ぶりの大荒行堂入行となります。

この日、法華経寺の境内には、師僧や留守を託す寺族、檀信徒が早朝から集い、入行僧を激励する光景があちこちで見られました。午前九時の昇堂の号令とともに大荒行堂正面の扉が開くと、教祥師はじめ一〇二人の入行僧は寺族、檀信徒に見送られて入堂しました。

(五ページに写真特集あり) (平山)



真浄寺の本堂。龍口法難会を行いました

御首題を いただく旅

第十九回 福岡県北九州市・真浄寺

八メートルのお釈迦様

「十月十日に私どものお寺では『龍口法難会』という法要を毎年行っています。その法要の後に、講演会を開いているのですが、平山さん、講師になっていただけないでしょうか。千か寺参りの喜び、楽しさについて語っていただけたらと思っっています。そんなお電話がかかってきたのは、今年六月ごろのことでした。千か寺参りを始める人がひとりでも増えて、仲間を増やす機会になるならと私は喜んで引き受けることにしました。

お電話の主は、北九州市小倉北区の日蓮宗寺院、真浄寺の院主でした。実は、この院主様は、日蓮宗新聞はじめ地元のミニコミ紙などにもたくさんのおツセーを書き、多数の著書のある方です。知る人ぞ知る中村潤一上人なのでした。

私は法要の前日にお寺を訪ねました。JR小倉駅からすぐ近くのオフィス街に、お寺はどーんと建っていました。日蓮宗寺院大鑑で調べてみると、慶長五年(一六〇〇年)の創建。開山大法院日周。開基真浄院日証、開基檀越細川忠興公とあります。境内には高さ八メートルのお釈迦様が露座していて、永代供養墓になっているということでした。

私を迎えてくれた院主様は、「平山さんに会わせたい人がいる」と言ってお会食の場に連れて行ってくれました。そこで初めてお会いしたのは、八十四歳の男性でした。お話をうかがうと、八十二歳の時から千か寺参りを始めたとのこと。『日蓮宗新聞の平山さんの連載『千か寺参りへ行こう』の記事を毎回読んでいるうちに、『あ、これだ！私もちやっ



てみよう』と思ったのです。院主様に相談したら『もうその年齢では千か寺成就は無理だから、やめておきなさい』と言われたのですが、『成就できなくてもいいのです。いろいろなお寺、住職、その家族との出会いがこれからの私の生きがいです。よろしく願います』と言ったら、院主様は『それならおやりなさい』と話してくれたのです。男性は生き生きと話してくれました。「こうして平山さんに会えたのも院主様のおかげです。千か寺参りの先輩に会うことができ、うれしく思います」とも話してくれました。私の父親世代の人から「先輩」と言われ、私は恐縮してしまいました。

男性は二年間で約五百か寺を訪ね、御首題をいただいたということでした。千か寺参りの楽しさ、つらさ、喜びを大いに語り合ったのは言うまでもありません。翌日は、真浄寺の本堂で、檀信徒さん約五十人を前に、私の千か寺参り体験を話してきました。もちろん、御首題もいただきました。貴重な機会を設けてくれた真浄寺の院主様、ご住職、檀信徒の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。(平山徹・新聞記者)

檀信徒さんの現世安穩祈るお加持 お会式法要

身延別院のお会式法要が十一月三日に営まれました。当院の檀信徒約七十人が本堂に参列し、日蓮聖人に報恩感謝のお題目を唱えました。お会式は、日蓮聖人がおなくなりになられた十月十三日の御命日を中心に、全国各地の日蓮宗寺院、教会、結社で行われる報恩感謝の法要です。

今年で七百三十二回を数えました。身延別院では毎年十一月三日・文化の日にお会式を行っています。たくさん檀信徒さんを迎えるために、お寺ではお会式に向けて万灯を準備したり、薄紙で作った花を本堂内に飾ったりと檀信徒さんの協力で会場づくりを進めてきました。

法要は午後一時から本堂で営まれ、藤井住職が日蓮聖人の教えに対して感謝の言葉を述べました。参列者は法華経のお自我偈などを誦し、お題目を唱えました。今年は藤井教瑞上人を修法導師にして、檀信徒の皆さんの現世安穩を祈念してお加持が行われました。



お会式法要で散華する住職ら



順番に焼香をする参列者(写真右)

木剣を手に加持をする教瑞師(写真下右)

当院入口に立てられた案内板(写真下左)



励まし受け壱百日の苦修錬行

檀信徒さんの幸せ願って



入行会を前に檀信徒さんと記念撮影

多くの人に見守られ荒行堂に向かう副住職(写真右、左から3番目)

入行会が行われる祖師堂に入る(写真右下)

荒行堂の前で(写真下)



十一月一日、大本山中山法華経寺の大荒行堂に第参行として入行した当院副住職の教祥師。この日、檀信徒さん七人から励ましの言葉をいただいた後、午前七時半に当院を出発しました。同八時過ぎに法華経寺に到着。見送りに来た人は少なかったのですが、それについて教祥師は「今回は、三回目という

こともあり、檀信徒の皆さんにわざわざ法華経寺まで見送りに来ていただくのはたいへんと思ってお声掛けはしませんでした」と話しました。そのうえで「檀信徒の皆さんの一人ひとりの願いがかなうように、私は百日間の行に励みます」と述べました。その表情からは、固

い決意のほどがうかがえました。午前九時から祖師堂で始まった入行会では、一〇二人の入行僧の一人として大音声の読経を堂内に響かせていました。来年一月には、初もうでを兼ねて、荒行堂の教祥師の見舞いを予定しています。檀信徒の皆さん、どうぞご参加ください。

寺の動き

大聖人の生涯描いたオラトリオを鑑賞



30年ぶりに再演されたオラトリオ
(「中外日報」より)

日蓮聖人七百遠忌の昭和五十七年に制作された楽曲「オラトリオ日蓮聖人」が今秋、東京と千葉で約三十年ぶりに再演されました。当院の河野信成師と檀信徒さんら十四人が十月十九日、東京都墨田区の会場を訪れ鑑賞しました。

オラトリオは「聖譚曲」と訳される音楽で、宗教上の偉人の生涯を物語るものです。「オラトリオ日蓮聖人」は作詞を西川満氏、作曲を黛敏郎氏が担当。日蓮聖人門下連合会が五年の歳月をかけて制作しました。

今回は、三年前から日蓮宗本山藻原寺(千葉県茂原市)の持田日勇貫首が中心となって準備を進めてきたものです。

荘厳な音楽の調べとともに、日蓮聖人の不屈の生涯が語られました。会場を訪れた千五百人

の聴衆は公演後も大きな感動に包まれました

お会式の花作り奉仕

身延別院の檀信徒さん有志が十月二十、二十一日、本堂地下ホールで、お会式の花作りに取り組みました。お会式では毎年、本堂の内外にピンクと白の薄紙で作った花をたくさん飾りつけます。その花をみんなで手分けして作り、竹や万灯にくくりつけます。

二日間で作った花は、ピンクの花が約千七百、白が約三百八十でした。

お手伝いいただいたのは以下の皆さんです。

阿久津喜美子、阿久津一美、伊東精子、今井善



お手伝いいただいた皆さんの手でできあがったお会式の花

子、奥野洋子、北村孝子、小島貴恵子、小林聰子、佐竹美智子、鈴木秀子、寺久保トシ子、灘本会理、灘本歌奈子、埴多賀子、林好江、龍憲吾、藤井孝子、藤井麻未、工藤祐子(敬称略)。ありがとうございました。

青年会が副住職の歡送会

身延別院青年会のメンバー十五人が十月五、六日、伊豆諸島の初島へ旅行に出かけました。十一月一日から中山法華経寺の大荒行堂へ第参行として入行する当院副住職の藤井教祥師を激励する目的です。

一行は熱海港からフェリーに乗り、初島に向かいました。漁師が経営する食堂で舌鼓を打ち、青年会メンバーの親睦も深めました。当院の檀信徒でお笑いコンビのボヘミアンも参加し、漫才を披露しました。

秋季彼岸法要に五十人

身延別院の秋季彼岸会施餓鬼法要が九月 日午後一時から、本堂で営まれました。檀信徒約五十人が本堂に集い、提婆達多品などのお経を読みました。

ご先祖をはじめ、ご縁のあった方々の塔婆をご供養しました。その後に住職から法話がありました。終了後に地下ホールでご供養がありました。

当院に新しい大黒様がお目見え

当院に新しい大黒様がいらっしゃいました。

東京・浅草の木村鶴光仏具店から届いたもので、高さ三十八センチ。

副住職の教祥師が中山法華経寺の大荒行堂に入行するのの際して、荒行堂に持ち込み、祈願をするものです。来年二月十日の成満後、魂の込められた大黒様となって当院に安置されます。

檀信徒の皆さんの中にも大黒様の祈願を申し込まれた方がいらつしゃいますが、それらの大黒様の「親大黒」として、ご縁を結ぶものです。荒行堂から当院に戻られる大黒様をおまいりください。



豆入れ奉仕のお願い

来年の追儺式(節分の豆まき)で用いる豆の袋詰め作業を、一月二十一日(火)、二十二日

(水)に行います。七センチ四方ほどの小さなビニールの袋に、さかづきを使って豆を詰め、袋の口を折りたたみ、ホチキスで留めていく作業です。一時間でも二時間でも、都合のつく時間がかまいません。お手伝いいただける方、今回もどうぞよろしくお願ひします

ホームページをご覧ください

当院のホームページ (<http://minobu-betsuin.jp>) は、副住職が荒行の間、教瑞師が担当します。

教瑞師はIT機器関連の操作を得意としています。さつそく、十一月一日には、副住職の大荒行会を、三日には当院のお会式の様子を、その日のうちにホームページに掲載しました。

これからもスマートフォンやタブレット端末などを駆使して、当院の動きをスピーディーに伝えたいと意気込んでいます。

当院のホームページは「身延別院」からも検索できます。寺報「願満」と合わせてホームページにもご注目ください。



今後の予定

十二月 一日(日) 願満祖師終日お開帳

十三日(金) 納めの十三日講法要並法話
午後一時より

二十四日(火) 納めの大黒大祭
午後一時より

一月 一日(水)〜三日(金)

太歳三ヶ日御祈祷、終日

十三日(月) 初十三日講法要並法話
午後一時より

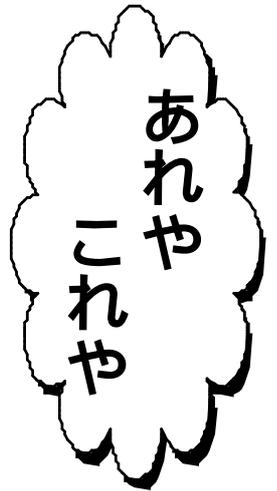
二十一日(火)、二十二日(水)

豆入れ奉仕
午前九時より

編集後記

副住職の教祥師が大荒行の第参行として入行されました。入行前、お話をうかがったのですが、「第参行は、初行、再行の時のように先輩の指示で動くことが減り、自分の意志で動くことができます。だから檀信徒の皆さんの願いが叶うように修行に励んでいきます」と話していたのが印象的でした。無事に成満されることを願ってやみません。次回は、節分後の発行を予定しています。

(平山)



フランス語の仏教百科辞書

過日十月二十四、二十五日の両日にパリで開催されたシンポジウムに出席のため、フランスを訪れた。このシンポジウムは、フランスの学問・教育の最高機関であるコレージュ・ド・フランスとフランス学士院の碑文・文芸アカデミーとの共催で、招待者の渡航費と宿泊代もここから支給された。何のシンポジウムかというところ、「仏教と百科辞書」というテーマで、仏教百科辞書の編纂を推進するためのものであった。どうしてフランスの国立機関がそんなことをするのかといえば、これには次のような一世紀近い由来がある。

日本の明治維新の頃、日本は西洋の近代科学や思想文化を吸収すべく、有意の留学生をヨーロッパに送ったが、その中の一人に高楠順次郎(一八六六～一九四五)がいた。彼は一八九〇年(明治二十三)にイギリスのオックスフォード大学にインド学・近代仏教学を学び、後にドイツの大学にも学んだ。帰国後には、東京帝大で梵語学(サンスクリット)を教えた。

この高楠順次郎は、今日も世界標準として用いている一切経の『大正新脩大藏経』や、パリ大藏経の『南傳大藏経』の編纂に尽力したことで名高いが、ヨーロッパのインド哲学の碩学たちとの交流を深めた社交家でもあった。彼が交流した学者の中に当時フランスのコレージュ・ド・フランスの教授で、インド哲学、仏教学の大家であったシルヴァン・レヴィ(Sylvain Lévi, 一八六三～一九三五)がいた。

レヴィ教授は、一九二三年に日仏会館の初代館長として来日したことがあった。高楠はこのレヴィ教授と図って、日仏共同で「和漢資料に基づく仏教百科辞書」を作る計画を立てた。「和漢資料に基づく」とは、中国の漢訳仏典資料、中国・日本の仏教者の著作などを資料とするということである。この辞書は『法宝義林』(法宝の意味の林)と名づけられ、その第一巻が一九二九年(昭和四)に刊行された。この辞書はフランス語で書かれ、項目はA,B,Cのアルファベット順の配列である。以来、延々と継続され、最新刊の



フランス学士院

第八巻が刊行されたのが二〇〇三年のことである。フランスではこの事業のために日本に法宝義林研究所を設立した。近年までその研究所は京都相國寺の中にあつたが、最近同じ京都市内に移転した。

『法宝義林』は約九十年かけて八巻が刊行されたが、それでどれだけ項目が書かれたかというと、なんとまだ一五項目だという。辞書全体の立項数はというと、約千五百項目だから、まだ十分の一にすぎない。九十年かけて十分の一だとすると、このままのペースでいくと、辞書完成までにあと何百年もかかることになる！一項目の解説が三十頁にもなるような記述もあって、執筆に大変な学殖と労力が必要であることは理解できるが、それにしても迂遠すぎる話である。それでこの事業を受け継いだコレージュ・ド・フランス教授、ジャンノエル・ロベール博士が、この現状を何とか打開しようとして辞書編纂の仕事に係る世界の仏教学者を招聘して開催したのが今回開催のシンポジウムなのである。

シンポジウムの第一日目はコレージュ・ド・フランスのユーゴー・フォンダシオン分館のサロンで朝九時から夕方六時まで行われ、日本、フランス、アメリカ、イギリスの研究者が十七の発表を行った。筆者は、『法華経解説辞典』の編纂について」という題で、現在編纂作業中の『法華経』の辞典について発表した。二日目の二十五日は午前中はユーゴー・フォンダシオン分館で、午後はフランスアカデミーの会議室で行われ、大変有意義であった。アメリカでは数人の学者が集まって、すでに同じような仏教百科辞書を完成しつつあると発表があつて、フランス語による仏教百科辞書が今日の程度必要なのかという根本的な議論も出されたが、いままでの日仏両国の文化交流の伝統を尊重しつつ、もっと効率よく、少なくとも一世代中に完成させようという基本的合意のもとに、今回の出席者全員が何らかの形で辞書完成に協力することになった。

仏教は日本だけでなく、ヨーロッパやアメリカにおいても、今日注目されていることを我々日本人は知っておかなければならぬだろう。

(住職)